

《翻 訳》

カール・カウツキー「オーストリア社会民主党の綱領の修正」^(訳注1)

太 田 仁 樹
(岡山大学名誉教授)

1899年のブリュン党大会で、オーストリアのわが同志たちは、1888年に採択された綱領に修正を加えるという決議をおこなった。同志アドラー、ダシンスキ、エレンボーゲン、シューマイアー、およびシュタイナーからなる委員会が、この仕事が委託され、その仕事の成果を8月の終わりに出版し、党の同志の批判に供した。

9月23日のヴィーンの『アルバイター・ツァイトウング』で、ヴィクトール・アドラーがわれわれに知らせているように、党綱領を検査したいというオーストリアの同志たちの願いは、原理的あるいは実践的欲求からよりも、形式的な、ほとんど審美的と言える欲求から発した。すなわち、ハインフェルト綱領は一つの原則解説と二つの決定からなっている。決議の一つは政治的諸権利を、他は労働者保護立法を扱っている。ところが多く点で、もはや今日の見方に照応しないやり方でなされていた。原則は変わっていないとはいえ、闘うプロレタリアートの力の自覚は高まり、彼らが今日の国家から闘い取ることのできるものに対する確信は増大した。他方でこれらの二つの決定には別のことが起こった。ブリュン(1899年)で、わが兄弟党は民族綱領(Nationalitätenprogramm)を決議し、グラーツのドイツ人党組織の大会で、一種の農業綱領を採択した。これらの変更のすべてについて、綱領の諸要求を多くの点で書き換え、統一的に編纂したいという願いが明白である。

綱領変更のこの面について、ここでは語るつもりはない。だが委員会は、われわれの原則が決して変化していないにもかかわらず、単にあれこれの点での誤解を予防するために、あるいは審美的な関心から個々の欠陥を除去するために、原則解説を改革するのを必要だと認めた。

どの社会主義的綱領の始めにもあるような原則解説に変更を加えるのに十分な根拠があるか否かは、疑問である。個々の要求ではなく、この原則解説は、われわれの綱領をあらゆるブルジョア的綱領と区別するものである。それらは「最終目標」とわれわれがそれを志向する根拠を含んでいる。だが、最終目標は、装飾的であるだけでなく、実践的にも非常に重要な機能を果さなければならない。それはわれわれにとって、多くの新参の社会主義者たちが考えるような、農民の居間の聖人像に相当するような意義を持つものではない。農民たちは、その前で習慣的に十字を切り、小ランプに火を付けているのであり、実践的な行動においてそれに思いをいたすことはない。われわれの最終目標は、むしろ、プロレタリア運動の統一を保持するという大きな実践的任務を持っている。

すなわち、それは二つの方向を向いている。プロレタリア運動が成長するほど、その中で分業がますます発達し、個々の機能がそれに特化した個々人に属するようになり、手段が目的に、単なる自己目的になりやすい。プロレタリア運動の個々のあり方が独立するようになるほど、それらの間に運動全体の力をしばしば侵害するような摩擦や矛盾がますます生じる。だがそれは、実践上の当面の些末な仕事のどのような手段も役立つような最終目標についての考えが、すべての構成員の間でますます生き生きしたものになり、最終目標についての見方がますます統一したものになるほど、諸矛盾はより容易に克服できるものになる。

だがこのことは、プロレタリアの諸運動の共存にだけでなく、連続においても統一をもたらすはずである。社会的および国家的な生活におけるあらゆる変動は、理論的に確立された最終目標を持たないほど、

状況すなわち時代の流行や雰囲気により依存するほど、これらの諸運動により反映する。あらゆる「ドグマ」と学校的見解から独立していることを最も誇っている者こそが、時代の流れに最も移ろいやすく流され、今日は天にも届けと歓声を上げ、明日は死ぬほどに悲しみ、今日は実行宣伝の立場からマルクス主義者を寝間着を着てスリッパを履いた小ブルジョアで革命家だと嘲笑し、明日は同じ人びとをブランキストだと告発する。それは彼らが使い捨てにされたくないからである。

明確な最終目標を有する確かな綱領は、そのようなジグザグコースにとって、強力な妨げになる。流行＝情緒政治家は、時々それを束縛だと感じ、教義ファナティズムだと罵り、綱領の文章をカトリック教会の信仰箇条と同一視するが、流行が過ぎ去り、党がそれに惑わされることなく、目標への正しい道をさらに進むなら、後にそれを有益なものだと感ずるだろう。

だが、運動の統一を維持することをわれわれの綱領の最終目標と原則の説明の任務の一つであると見なすなら、確固たる論拠なしに、若干の体裁の悪さのためだけに、綱領の原則説明にあちこちつぎを当てることは、その目的に矛盾するという結論がきつと生ずる。

私の考えでは、よく考え厳密に表現されていれば、綱領の原則的な部分を変更するように社会民主党を誘うような根拠は二つのしかありえない。まず、外面的な表現をも必要とするような、組織における根本的な変化である。すなわち、二つの対立する分派が統合する場合である。その場合には、たとえ以前のものとは根本的に違ってないにしても、新しい綱領なしではやっていけない。新しい綱領だけが、われわれが新しい組織によって行動すること、他の組織ではできないこと、勝者も敗者も存在しないことをはっきり示すことができる。ゴータ綱領やハインフェルト綱領の形成はこのような機縁である。

だが、綱領は、党の理論的思考における根本的な変化が生じた場合にも、変更されねばならない。そのためにエルフルト綱領がつけられた。確かにそれを表現したマルクス理論は70年代にすでに完全に発達していたが、ドイツ社会民主党の頭脳にはなおしばらく定着することはなかった。統一したマルクス主義の見方が古い俗流社会主義を駆逐するまでには、長く困難な作業が必要であった。エルフルト綱領が登場するや、古い綱領も保持しえないものになった。

綱領変更はこの二つの原因の一つがあるとは、誰も主張しようとは思わないだろう。ベルンシュタインの修正主義運動に最も前途有望に立ち向かった者も、自分がわが党に新しい理論的基礎をもたらしたとは主張しない。ただ、彼はそれに必要な準備作業をしたのである。だからベルンシュタインの立場から見ても、綱領の新しい創造は早すぎただろう。

だがアドラー自身が説明しているように、新しい綱領草案は、ベルンシュタインの立場への譲歩ではなく、それを考慮する限りで、ベルンシュタイン風の批判主義の結果、古い綱領の幾つかの文章がこうむっている誤解を、取り除く努力に起因するにすぎない。

この動機は、確かに非常に重要なもので、変更することが決まっていれば、原則説明の個々の文章の定式化にとっては、非常に注意すべきものであろうが、この変更そのものにとっては十分な理由となるものではない。

確かにその必要な短さゆえに、われわれの綱領に誤解は常に付きまとうものであろう。分厚い本で展開される理論でさえ、生活を汲み尽くすことはできず、いつも本質的な諸点を際立たせるだけで、非本質的なものや偶然的なものを度外視せざるをえない。だから生活は、理論よりも、いわんや原則説明に含まれる理論の精髓よりも多様なものである。われわれの理論を完全には把握していないか、非本質的なものと本質的なものとを区別できない人びとは、われわれの原則説明を、われわれがどんな風にそれを表現しているとも、常に誤解する可能性があるだろう。綱領の変更によってどんな誤解の出現にも答えても、毎年修正をおこなうことがあるだろう。

だが、体裁の悪さも毎年発見できるだろう。ある主題に誰にも全く異論のないような表現を与えることは不可能であり、しばしば起草者自身がより厳密でより適切な表現をすぐに見つけ出す。それが修正のための十分な理由があるのなら、われわれは綱領の修正を仕上げることはない。より装飾しようとするほど、その主要な美点、内的な統一と調和をますます損なうことになる。

まさにハインフェルト綱領のような非常によく考えられた作品は、この点で修正によって最も容易く傷つけられる。ついでに言えば、自慢するわけではないが、私はこの綱領をとても高く評価している。ハインフェルト綱領をアドラーと私が作成したと、『ゾツィアリスティッシュ・モナーツヘフテ』でヘルツ^(訳注2)が言っていることは正しくないからである。アドラーが単独で起草し、最終編集で私の助言を請うただけである。その際、私は、若干の小さな所見を除けば、それを喜ぶ以外の何もしなかった。

だから原則説明を変更すべき異論のない根拠はない。どの場合にも、このような変更は骨の折れるやり甲斐のない仕事である。その際何が生じたか見てみよう。

まず、比較することができるように、古い綱領と新綱領の草案とを並べて公にしよう。

ハインフェルト綱領 ^(訳注3)	新しい草案
オーストリアの社会民主労働者党は、民族、人種、性の区別なく全人民のために、経済的隷属の拘束からの解放、政治的無権利の除去および精神的萎縮からの向上に努力する。これらの恥ずべき状態の原因は、個々の政治的諸制度の中にはなく、社会状態全体の本質を制約し支配している事情、すなわち労働手段が少数の所有者の手に独占されているという事情に求められるべきである。労働力の所有者である労働者階級は、それによって労働手段の所有者である資本家階級の奴隷となる。資本家階級の政治的・経済的支配が今日の国家に表現されている。生産手段の個人所有は、政治的には階級国家を意味するのと同様に、経済的にはより広範な人民諸階層における大衆窮乏の増加と貧困化の増大を意味する。 技術の進歩と生産力の巨大な発展とによって、このような所有の形態が単に不必要であるばかりでなく、さらに人民の圧倒的な多数の者にとって事実上廃止されていることが証明された。同時に他方では、共同的所有という形態のために必要とされている精神的・物質的前提条件が形成されている。労働手段を労働する人民全体の共同の所有に移すことは、労働者階級の解放を意味するだけでなく、歴史的に必然的な発展を実現することを意味する。この発展の担い手となりうる者は、ただ階級意識を持ち、かつ、政党に組織されたプロレタリアートだけである。それゆえ、彼らを政治的に組織し、彼らの境遇と任務との自覚を持って彼らを満たし、彼らを精神的・肉体的に闘争能力あるものとし、かつ、その闘争力を維持することは、オーストリアにおける社会民主労働者党の真のプログラムである。このプログラムを実現するために、党は、目的達成に役立つあらゆる手段、また、人民の当然な権利意識にふさわしいあらゆる手段を使用するつもりである。その他の点においては、党は、その戦術をその時々事情に応じ、特に反対者側の態度に応じて立てなければならない。	オーストリア社会民主党は、民族、人種、性の区別なく全人民のために、経済的隷属の拘束、政治的無権利および精神的萎縮からの解放に努力する。今日の状態の原因は個々の政治的諸制度の中にはなく、社会状態全体の本質を制約し支配している事情、すなわち労働手段が少数の所有者の手に独占されているという事情に求められるべきである。労働力の所有者である労働者階級は、土地を含めた労働手段の所有者である大地主階級と資本家階級にますます従属することになる。大地主と資本家階級の政治的・経済的支配が今日の階級国家に表現されている。 技術の進歩、生産と所有の集積の増大および資本家と資本家集団の手の中でのあらゆる経済的支配力の結合、その結果、以前は独立していた小企業家のますます多くがその生産手段を手放し、賃労働者あるいは職員として、直接あるいは間接に資本家に従属するようになり、小農民は債務奴隷に転化する。より広範な勤労人民の諸階層の生活水準は、自分の生産力の急速な上昇とそれ自身が作りだす富の膨張とにますます逆行するようになる。資本主義的な生産様式の無計画性に発する危機は、失業と貧困という結果を伴って、この発展を加速化し先鋭化する。 だが資本主義の発展がプロレタリアートを膨張させるほど、プロレタリアートは、資本主義に対する闘争の増大を余儀なくされ、またその能力を獲得する。そして以下のような意識が現れる。すなわち個人的生産の駆逐は個人的所有をもますます無用で有害なものにし、同時に協同組合的な生産と共同所有の新形態のために必要な精神的・物質的な前提条件を形成せざるをえないし、人民の全体の共同体的な所有への労働手段の移行が労働者階級の解放のための闘争目標にならざるをえない、というものである。この必然的な発展の担い手になりうるのは、階級意識に目覚め、階級闘争のために組織されたプロレタリアート自身だけである。彼らを政治的に組織すること、彼らをその境遇と任務の自覚で満たすこと、彼らを精神的・肉体的に闘争能力あるものにして、それを維持することは、それゆえオーストリア社会民主党の真のプログラムである。このプログラムの実現のために、社会民主党は目的達成に役立ち、人民の当然な権利意識にふさわしいあらゆる手段が使用されるだろう。 オーストリア社会民主党は、あらゆる政治的・経済的な問題で、常にプロレタリアートの利益を代表し、支配的な諸政党のための階級対立および労働者の搾取のあらゆる曖昧化と隠蔽に精力的に反対する。 オーストリア社会民主党はインターナショナルな（民族の枠を超えた）党である。党は諸民族の特権に対して、出自と性の特権に、所有と血統の特権に対してと同様に、反対する。そして搾取に反対する闘争は、搾取それ自身がそうであるのと同様に、インターナショナルなものである。党は、どのような形態であれ、意見発表の自由のあらゆる制限および国家や教会による精神的な後見に反対しそれと闘う。党は勤労諸階級の生活水準の法的な保護のために努力し、公的生活のあらゆる領域でプロレタリアートに相應の影響力を獲得するために闘う。

比較するとすぐに注意を引くのは、党名が変更されるべきだということである。「社会民主労働者党 (sozialdemokratische Arbeiterpartei)」の代わりに「社会民主党 (Sozialdemokratie)」になっている。これは表現の短縮によるものにすぎないことは明らかである。オーストリアの社会民主党のプロレタリア的性格が今や、従来よりも明白ではなくなったと、誰も主張することはできない。

今やオーストリアの社会民主党について語るのもはやオーストリアにおける社会民主党について語るのではないということは、重苦しさを取り除くためにすぎないことも明らかである。だがまさにこの後者の表示は極めて特徴的である。それが確認しているのは、オーストリアの社会民主党 (Sozialdemokratie Oesterreichs) にとってこの国 (Land) は地理的な概念であり、活動することは有罪であると党が宣告されている枠組みであること、だが、たとえばドイツや、フランスや、イギリスのように、ある特別な民族 (Volk) の社会民主党として自覚するのではないこと、である。オーストリア国家——厳密に言えば、決して国家ではなく、オーストリアーハンガリー君主国にすぎない——は存在するが、オーストリアには、オーストリア民族 (Volk) は存在せず、諸民族 (Völker) が存在するにすぎない。そしてオーストリアにはオーストリア人社会民主党は存在せず、ドイツ人社会民主党、チェコ人社会民主党、ポーランド人社会民主党、等々が存在し、それらは一緒にオーストリア社会民主党を形成している。このような独特な状況が、オーストリア社会民主党について語るのに先立って、原則解説がオーストリアにおける社会民主党について語ることで特徴付けられる。

次の変更は以下である。古い綱領においては、人民が解放されるべき拘束を枚挙した後で言われている。「これらの恥ずべき状態の原因は、個々の政治的諸制度の中にはなく」、生産手段の私的所有にある。それに対して、新しい草案は「今日の状態の原因」について語っている。それは決定的な後退である。今日の状態とは何と精彩のないことだ！ われわれが状態と闘っているのは、それが恥ずべきなのであり、それが今日のことからではないのである。

だが「今日の状態」という表現は、弱々しいだけでなく、間違ってもいる。古い綱領において恥ずべきものと特徴付けられている今日の状態のあるもの、労働者の抑圧、搾取、萎縮だけが、その最終的な原因を生産手段の私的所有に持っている。だがそれは今日の状態のすべてではない。今日ヴァグナーの楽劇がマイアーベアーよりも好まれている。毎年ますます多くの登山家が墜落する。神を信じず人間を猿から派生したとする人びとがいる。それらは「今日の状態」であるが、それについて生産手段の私的所有に遡ろうとはしないだろう。

「これらの恥ずべき状態」を「今日の状態」で代替することは、だから全く不適當で、われわれが一定の意図を持ってではなく、軽率に書いたにすぎないのなら、無益なことである。

次の変更に行こう。

古い綱領には次のような文章がある。「労働力の所有者である労働者階級は、それによって労働手段の所有者である資本家階級の奴隷となる。」新しい草案では次のように言われている。「労働力の所有者である労働者階級は、土地を含めた労働手段の所有者である大地主階級と資本家階級にますます従属することになる。」

この変更は何故だろう？ 残念ながら新しい草案には狙いについての情報が付されていなかったのだから、個々の変更の原因を推測せざるをえない。綱領委員会には「奴隷」という表現は強すぎるように思えたのか？ 当然、法的には奴隷ではない。そのように特徴付けるか否かは、全く主観的な見解に依存する。人が情熱的であるほど、彼が要求する自由の程度が大きいほど、ますます労働者を賃金奴隷と特徴付けることができるだろう。その言葉は「従属する」という精彩のない言葉よりも決定的に力強く、支配＝搾取関係をはるかに造形的に表現している。

ある点で新しい表現が弱い印象を与えているとすれば、他の点では強くなっている。古い綱領は、生産手段の私的所有から、賃金奴隷制の事実をその傾向を詳論することなしに説明している。草案は労働者の従属の増大について語っている。特に、修正主義的な議論がいわゆる貧困化理論について広めた誤解を予防する任務が、綱領委員会に与えられたときに、この変更はより一層奇怪なものになった。なお後に見るように、この誤解を全く新しい段落と古い段落の削除によって除去しようとする試みがあった。ここに再び裏口が開かれることになる。

従属の増大についての文章が正しいか、間違っているかは、それをどう理解するか次第である。それは資本主義システムの必然的な傾向としては正しい。それは労働者をますます隷従させるよう不断に務めなければならない。すでに経営の集積、財産と、とりわけ管理の少数者のもとへの集中が生じ、不熟練労働者による熟練労働者の、女性による男性の、機械による人間労働力の、文化的に遅れた諸民族（Nationen）と住民による文化的に進んだ諸民族と住民の代置が生ずる。だが、マルクスを読み、理解する者なら誰でも、このことが、社会発展が引き起こす弁証法的なプロセスの、一つの、とはいえ必然的な側面にすぎないことも知っている。圧迫が増し、だが、それとともに、資本主義的生産様式のメカニズムそのものによって教育され組織される、膨張するプロレタリア大衆の激昂も増大する。資本は男性の代わりに屈従した女性を雇う——だが今や女性も、プロレタリアートの解放闘争に参入し始める。ドイツ人の奴隷の代わりにイタリア人を雇うが、すぐに彼らも、ストライキや自己の組織化等々を始める。

闘争の結果は一定しない。だから、労働者の従属の増大について、一つの傾向の特徴付けとしてではなく、社会的闘争の一つの結果の確認として理解するなら、それは間違っている。こちらでは労働者の従属が増大し、あちらでは縮小する。こちらではわれわれは「立憲的工場」へ歩を進め、あちらでは工場内封建制が発展する。だがどの場合にも生ずることは資本と労働との対立であり、従属の増大への資本主義的傾向と独立へのプロレタリア的欲求の増大との矛盾であり、資本主義社会の存在する限り階級闘争と資本主義打倒への志向を必然にする矛盾であり、その克服によってのみ終了することができる矛盾である。

従属の増大について当てはまることは、同様に貧困の増大について当てはまる。双方とも同じ意味で正しく、同じ意味で間違っている。どちらの傾向も社会主義的綱領に属している。どちらも資本主義的生産様式における社会的発展の必然的要因を形成するからである。だが、資本主義から生ずる貧困の増大への言及が誤解を引き起こすことを恐れるなら、従属の増大について語る必要もない。

綱領の新しい表現では、文章が一貫していない。その採用は、われわれが今論じなければならない次の変更矛盾している。すなわち、生産手段の私的所有が「より広範な人民諸階層における大衆窮乏の増加と貧困化の増大を意味する」という文章は削除され、その代わりに、全く新しい段落、資本主義的諸傾向をずっと詳細に描いている第二の段落が現れている。

この段落の最初の部分では資本の集積による小企業者の収奪が描写され、それに資本主義的發展によって「債務奴隷に転化」される小農民が対比される。おそらくこの文章は最近数十年の大経営による小農業経営者の駆逐がかつてないほどに続いたという新しい認識に対応するものであろう。今や収奪に代わって、資本による暴行が債務奴隷においてははっきりと現れる時点が見いだされると思われる。だがその場合に新しい誤解に陥った。農業においては債務に苦しみ小農民だけがそうであるかのような印象が引き起こされる。決してそうではない。抵当債務は、借地制度が支配的でない場合に、私的土地所有において一般に資本主義的生産様式の必然的な様式として現れる。資本主義的發展は、地代を独立させ、農業者を特別な人格としての単なる地代所有者と対立させるように迫る。最も明瞭なことは、地主と借地人の関係の形で現れ、抵当権者と債務者の関係の形では隠されている。だがその場合、借地人と同様、債務者もより大きな資本主義的企業家でありうる。債務は必要の産物で、さらなる必要を生み出す可能性があるが、これは必

然なものではない。

農業においては、債務は小経営に固有の現象でないし、緊急状態が現れる唯一の形態でもない。小農民の収奪は否定され、工業におけるのとは違った形でわれわれの眼の前に明確に現れる。小農民を収奪するのは、大経営の競争であるというのはもはや減多になく、資本主義の全く経済的で政治的（staatlich）な生活である。その場合、租税と兵役が、債務利子と同様に協同する。小農民の収奪は一時的に大経営の増大に現れるのではなく、むしろ一方の離村、他方の工業化に現れる。農村に残った者は往々ますます農業をやめ、彼らは生計を支えるために、労賃のための（森林、鉄道、石橋、工業等々における労働）、あるいは家内工業による生計労働と並行する家計の付属物となる。他面では、農業はますます工業経営、砂糖工場、火酒醸造所等々の付属物になる。

この非常に複雑な過程を描写しようとせず、なおそれが十分に解明されていないと考えていたなら、おそらく農民について完全に沈黙するのが最善であった。農民の困窮を単なる負債に還元するのは誤謬を導くものである。少なくとも現存の綱領が誤解を許すものであるから、それに代わる綱領として大目に見たのかもしれない。

だが、綱領変更の全体の頂点をなす文章は、よりゆゆしい誤解を許している。それは「貧困化理論」のどのような誤解をも不可能にするはずのものである。それによれば、「より広範な勤労人民の諸階層の生活水準は、自分の生産力の急速な上昇とそれ自身が作りだす富の膨張とにますます逆行するようになる」。

学問的命題としてはこの文章は非の打ちどころがない。だがここは、おそらくプロレタリアートの生活水準について年季の入った論文の結論ではなく、より広範な人民諸階層の大衆窮乏の増加と貧困の増大をもたらしたという資本主義を告発する文章に代わる社会民主主義の綱領である。この最後の文章は、大衆窮乏と民衆貧困に対する闘争を社会民主主義運動の内容にしていた。新しい草案では、労働者層の生活水準の向上のテンポの急速化のための闘争の内容となっている。労働者層の福祉が上昇すれば、草案の文章を理解することができる。だがそれは「労働の生産力の急速な上昇」ほどには上昇しない。資本家の福祉はプロレタリアのそれよりも急速に上昇し、プロレタリアはそのことで苛々して、それゆえ資本主義を社会主義的生産様式に代えるよう望むだろう。

だから問題は、プロレタリアートの生活水準のわずかな改善を苦勞して資本から闘い取り、またあらためて脅されるということではない。広範な人民の諸階層のために資本が、その利潤欲によって、窮乏化の傾向だけでなく、現実の貧困増加を生みだすことは言うまでもない。ときには賃金が上昇し、労働時間が縮減しても、労働者の家族を解体し、妻を生計労働に駆り立て、住宅難を増加しようと、至る所で努力がなされる。そしてガリツィアの没落する零細農民、ヴィーンの細工師、北部ベーメンの家内工業者の窮乏がいかなるものか、オーストリアの同志自身が最もよく知っている。改善は、主に労働組合に組織された労働者および若年の労働者に限られている。若年の労働力が求められ、最も容易に肉体労働の勤め口を獲得することができる。だが、資本はその奴隷を急速に使い尽くす。すでに45才の労働者は、もはや貧困の増加以外の何も期待されない老人である。その収入は減退し、業務不振のときにはいつも老人が最初に解雇される。事業が振興しているときにはいつも老人は最後に受け入れられる。失業の周期はますます頻繁になり、ますます長く長くなり、ついには、老労働者は肉体も魂もぼろぼろになり、救貧院や完全な零落に陥る。

労働者層の黄金郷として非常に賞賛されている英国では、老労働者の半数が救貧院で死んでいる。

そして、若い、労働組合に組織されている労働者の状態は決定的に改善されているが、彼らも、新しい機会、新しい労働方法、新たに奥地に労働者を送り込む新しい交通路、企業家の新しい同盟や新しい強制法によって、彼らの闘争の果実が奪われ、貧困に突き落とされる危険に常にさらされていないだろうか？

その労働組合をしっかりと基礎付けられたもので、取消のおそれのないものと見なしていた英国の労働者は、まさに今警告を告げる例となっている。どのようなプロレタリア的組織、どのようなプロレタリア的成果も、資本主義国家のいかに不確かな土台の上にあるのかを、一夜にして貴族たちから教えられている。

もちろん綱領委員会はわれわれと同様そのすべてを知っているし、論文である必要もない綱領においてそのすべてを言うことはできない。だが削除された文章には、大衆窮乏と広範な人民諸階層の貧困の増大についてすべてが述べられている。それに代わるべき文章にはそれが欠けている。

二つの文章は誤解される可能性がある。一つの文章は、今日の社会では貧困に対するどのような闘いも望みのないもので、われわれは広範な人民諸階層の貧困化から社会的な転覆への衝撃を期待していたというように理解することができる。逆に新しい文章は、貧困は発展の成り行きの中で富の増大によっておのずと駆逐される資本主義社会の小児病にすぎず、この発展がわれわれにとって十分に速くないだけであるという自由主義的で楽観的な見方をわれわれがしていると、理解することができる。

綱領のどの文章も誤解にさらされるかもしれないと、確かに私には思われる。それに対して、基本的理論形成は、綱領を説明するわが扇動者を援助するにすぎない。どのような誤解に対しても防衛し、それに含まれる外見上の誤解を、常に思想の単なる矛盾としてではなく、物の矛盾として現象させるような、貧困についてのわれわれの見方の表現は、短い文章には存在しないかもしれない。そうであるなら、私には古い削除された文章は新しい文章もよりもなお妥当なものであると思われる。資本主義が自然必然的な大衆窮乏と大衆貧困を生みだすことを認識させない詳細な社会民主主義的綱領は、この窮乏と貧困に対する闘いを社会民主党の努力の内容として特徴付けるものではなく、われわれの運動の決定的な側面を隠すものであり、それゆえ深刻な欠点を含むものである。

新しい綱領草案が貧困について語っている唯一の文章は、この欠点を小さくしていない。それは以下のように論じられている。すなわち、「資本主義的な生産様式の無計画性に発する危機は、失業と貧困という結果を伴って、この発展を加速化し先鋭化する」。それゆえ、草案では、貧困については、ただ危機の付随現象として語られるのみである。今日の社会に恒常的で持続的な大衆貧困が存在すること、プロレタリアートがそれに対して身を引き締めることがなければ、常に増大するおそれのある貧困、それについて綱領草案から何ものも知ることがない。

今日の社会についての悲観的な見方にしたがって、古い綱領を誤解することがあるとすれば、楽観的な見方にしたがって、新しい綱領を誤解する恐れがある。この社会に対して闘争する政党にとって、どのような誤解がより危険かは、詳しく述べる必要はない。

「貧困化理論」の誤解と並んで、新しい草案から除去すべき別の大きな誤解がある。アドラーが前述の論文で言っているように、草案は「資本主義の必然的な結果であるのと同様、社会民主主義運動を意識して望むプロレタリアートの行動であることを、おそらくは従来よりも明確に表現すべきである。ここでもあらゆる批判主義的な誤解の中で最も下らないものに出くわす。あたかも、歴史発展の必然性の認識や労働者層の意識と意欲へのこの認識の影響が対立を基礎付けるかのようである」。

この目的のために、なによりも以下の文章が役立つ。「個人的生産の駆逐も個人的所有をますます無用で有害なものにし、同時に協同組合的な生産と共同所有の新形態のために、必要な精神的および物質的前提条件を形成せざるをえないし、人民の全体の共同体的な所有への労働手段の移行が、労働者階級の解放のための闘争目標にならざるをえないということを、それ（プロレタリアート）は意識するようになる」。

それに対して、古い綱領では、以下のようにになっている。技術的發展は生産手段の個人的所有という形態をますます無用なものにし、多数の人民のために排除する、「他方では、共同的所有という形態のために必要とされている精神的・物質的前提条件が形成されている。労働手段を労働する人民全体の共同の所

有に移すことは、労働者階級の解放を意味するだけでなく、歴史的に必然的な発展を実現することを意味する」。

もちろんこの表現は、必然的な発展におけるプロレタリアートの意識と意欲が果たす役割の過小評価に惑わされている。だが新しい文章は再び反対方向に間違いを犯している。プロレタリアートが協同組合的生産と共同所有の新形態のために、必要な精神のおよび物質的前提条件を形成せざるをえないという文章がいかに間違いに導くものであるかを、すでに『アルバイター・ツァイトウング』（10月10日）でツェターバウムによって正しく示されている。それにもかかわらず、古い綱領は、それは今日すでに必然性を持つてつづられているということを確認している。私はツェターバウムが言ったことを繰り返すことができるだけである。

すべての協同組合、労働組合、そしてその他のプロレタリア的な諸制度、その上現代国家におけるプロレタリアートの一貫したすべての政策は、それが資本主義——その生産過程およびすべての他の機能——が自分でつくりだす限りにおいてのみ、社会主義社会のためのこの非常に重要な前提条件をつくりだすことができる。このことを現実統制することは容易である。ちなみに協同組合等々のすべてのプロレタリア的な諸制度が資本主義の直接の発展からおのずと生じた、またそこから日々生じている。多くの良き同志たちにおいても、未来についての考えが協奏するかもしれないけれども、これらのプロレタリア的な諸制度が、プロレタリアートの現代的な欲求から生みだされ、つくられるのであり、将来の社会主義社会に目的のためではない。この事情について、社会民主主義の綱領は顧慮しなければならず、たとえ実在する内容であっても、ユートピア的な定式化で要求する必要はない。プロレタリアートが将来の社会主義社会のために、あるいはこれを顧慮して、現代の諸制度をつくり、またつくるべきだと考えることを、私は軽い程度のユートピア物語と見なすからである。われわれが自治体綱領を起草し、鉱山の国有化を要求し、協同組合を創立するとしても、われわれはプロレタリアートの今日の欲求とすでに活動している発展利益からなしているものであり、それ以上に社会的生産の新しい形態を準備するためにはではない。これらのすべてのわれわれの諸要求と諸制度が同時に「新しい形態の前提条件」そのものとなるなら、それは別の何かである。なぜなら、プロレタリアートの発展利益は社会的秩序の発展と一致するからである。

「最終目標」についての意識は社会主義運動において大きな任務を果たさねばならない。だがわれわれはこの任務を、将来の社会主義的生産に必要な精神のおよび物質的な前提条件を任意に人為的につくることにではなく、この論文の初めて説明した意味で、プロレタリアートの解放闘争に統一をもたらすことに見いだす。

だが、新しい表現は、修正主義的な誤解を予防しようと努力して、それが実行できるよりも社会主義的意識に期待する一方で、別の修正主義的誤解に門を開いている。わが修正主義的批判家の多くは、マルクスは経済的發展と階級闘争が社会主義的生産だけでなく、直接にその必然性の認識も前提条件であると主張していたと仮定しているが、批評家たちは、最高に資本主義的に発展した国である英国が、あらゆる近代国家のうちで最もこの認識から免れているという抗弁に熟達しているからだ。

新しい表現にしたがえば、オーストリアの綱領委員会は、このように反駁されたいわゆる「正統マルクス主義的な」立場を共有していると信じられるかもしれない。すなわち「資本主義の発展がプロレタリアートを膨張させるほど、プロレタリアートは、資本主義に対する闘争の増大を余儀なくされ、またその能力を獲得する」。社会主義の可能性と必然性の「意識」が現れる。

この関連では社会主義的意識がプロレタリアの階級闘争の必然的な直接的成果として見える。だがこれは間違っている。もちろん、教義としての社会主義は、プロレタリアートの階級闘争と同様に現代の経済

的諸関係に根ざすものであるが、プロレタリアートの階級闘争も資本主義が生みだす大衆窮乏と大衆貧困に対する闘いに発するものである。だが、両方とも相並んで生成するもので、対立して生成するものではなく、様々な前提条件のもとで生成するものである。近代の社会主義意識は、深い学問的洞察を基礎にしてしか存在しえない。実際、現代の経済学が、おそらく現代の技術と同様に、社会主義的生産の前提条件をつくりだすのであって、どんなに望んでも、プロレタリアートはどちらもつくることはできない。だが、学問の担い手は、プロレタリアートではなく、ブルジョアの知識階級である。確かにこの階層の個々の成員の中に近代的社会主義が生成し、彼らを通じて初めて精神的に卓越したプロレタリアに伝えられ、その後、諸事情が許す場合に、プロレタリアートの階級闘争の中に引き入れられた。それゆえ、社会主義的意識は、外部からプロレタリアートの階級闘争に引き入れられるものであり、そこから自生的に生ずるものではない。

したがって、古いハインフェルト綱領も全く正しく言っているように、その境遇と任務についての意識でプロレタリアートを満たすのは、社会民主党の任務に属する。もしこの意識が階級闘争から自然に自然に出てくるものなら、それは不必要であろう。新しい表現は、この文章を古い綱領から受け取り、まさに討議された文章に付け加えた。だが、それによって思考の流れは全く引き裂かれてしまった。新しい表現にしたがえば、われわれはプロレタリアートの中に、階級闘争から自然に生じるその歴史的な任務についての意識を持つ。その後その意識は社会民主党によって再び階級闘争に引き入れられるのである。それによって、ものごとは決して明瞭になることはなく、まさにそれによって誤解が刺激されるのである。

以下の二つの段落は、わずかに批判を引き起こすだけである。次の段落で、オーストリア社会民主党は「支配的な諸政党のための労働者の搾取に精力的に反対する」と言われているが、きっと新しい草案の起草者は、社会民主党は、反ユダヤ主義者、農民同盟、全ドイツ主義者、青年チェコ党、民族社会主義者等々のブルジョア的な野党による労働者の搾取を是認すると言いたいのではないだろう。ブルジョア的な諸政党について語るなら、誤解は少ないだろう。

結論の初めで、「それ（社会民主党）は、勤労諸階級の生活水準の法的な保護のために努力する」と、述べられているのは、全くよくないとわれわれには思われる。社会民主党がいわゆる労働者の保護、工場立法－作業場立法に自己を制限するのではなく、生産過程外の勤労人民の世俗的福祉を、住宅政策、学童への国家あるいは自治体の保護、医療制度の無償化等々によって配慮するように努力することを、「勤労諸階級の生活水準の保護」によって明確に語るのが望まれるだろう。

保護を必要とするのは労働者の人格であって、生活水準ではない。むしろ生活水準は非常に悲惨で、今の水準での保護ではなく、その改善を必要とする。他面では、たとえば労働者の生活水準のための労働時間の長さを斟酌することは珍しい。おそらく「国家と自治体による労働力の保護の努力と労働者階級の生活水準の改善」と言うのがよいかもしれない。

文章は次のように終わっている。「そして、党は公的生活のあらゆる領域でプロレタリアートへの相応の影響力を獲得するために闘う」。

この文章は少なからぬ疑念を引き起こす。それは、プロレタリアートが公的生活におけるその影響力を強化するどのような機会をも利用せねばならず、そのために公的生活の非常に多様な領域で活動しなければならない、ということ以外のことを言おうとしていない。だが、すべての領域においてということである。それが正しいかどうかは、「公的生活」で理解しているものが何であるか次第である。公共空間の中で進行しているすべての生活を斟酌するなら、それは言い過ぎである。その場合、階級対立に関係のない公的生活の領域が存在する。そこには、階級としてのプロレタリアートは影響力をもたないということは、他の階級と同様である。たとえば芸術がそうである。プロレタリアートが芸術的展覧会、コンサート、観

劇に興味を持つことは、確かに非常に望ましいことである。だが、それは人間としてそうなのであり、プロレタリアとしてではない。そして、公的生活これらの領域への影響力は、ただ、その道の権威者である限りだけであり、プロレタリアである限りではない。

だが、上述の意味で理解するなら、その文章はプロレタリアートに与えているものは多すぎるが、公的生活を共同社会のための活動や階級闘争の領域に限定するなら、それが与えているものは少なすぎる。その場合は、プロレタリアは「相応の影響力」以上のものを要求せねばならず、支配に向けた努力がなされねばならない。もちろんプロレタリアートが、最下層の階級として支配を実行することができるのは、諸階級を廃棄し、それによってどのような階級支配をも廃棄するためにだけである。それに対して、プロレタリアートの任務はある影響力を獲得することに限定し、それによって権力全体の獲得と階級の廃棄を放棄するならば、それは、プロレタリアートが所与の社会的組織に適応し、他の階級の存在を御し難い矛盾として認め、「相応の影響力」の承認以上をもはや彼らに要求しないように願っている、わがブルジョア的な社会政策家の理想に甘んずることである。

だがこの表現が、われわれが敢えて権力を志向するのではなく、分相応であることを志向すると、プロレタリアートの政治的権力の奪取はユートピアであり、しかも危険なユートピアであると明言する声が、あの修正主義者のもとで大きくなったよりも、ますます接近している。この意味で文章を解釈することは、綱領草案において社会民主党の任務として政治権力の奪取がどこでも主張されていないことによって、なお助長されている。古いハインフェルト綱領の原則説明が政治権力の奪取についても語っていないことに、特別な意図はない。だが、われわれが公的生活においてプロレタリアートの限定された「相応の影響力」についてのみ獲得すべきだと語るなら、あらゆる修正主義的な誤解に扉と門を開くことを意味する。

言うべきだったのは、以下のことである。社会民主党は、どんな機会をも利用して、公的生活においてプロレタリアートの影響力を増大し、プロレタリアートによる政治権力の奪取という大きな目標に近づくことを任務と見なしている。

* * *

終わりに、本稿がわれわれ自身が予期したよりも長くなってしまったことを自己批判する。それはときとしてはなほ鋭いものになったが、新しい綱領の草案に異論を唱えるような印象を引き起こすのを望むものではない。

われわれがここでいかにおこない、また綱領草案についていかにおこなうべきかを、仔細に見る者はわずかな綱領のみを見いだし、そこに多くのことを見いだすことはないかもしれない。ほとんどどこにも間違いはなく、たいていは、われわれが明らかにすべきありうる誤解の源泉である。

新しい綱領の思考の歩みは、学問的に基礎付けられたものであり、個々の文章は優れたものである。ともあれ、新しい綱領は現代的な表現で書かれているので、インタナショナルな社会民主党の最良の綱領に数えられるであろう。オーストリアのわが党の同志たちは自らを恥じる必要はない。

だが、恐るべき競争相手がいる。ハインフェルト綱領である。新しい綱領をそれだけで見れば、一見したところ非常に満足な印象を与える。だが、先行者と比較すると、その印象は薄まる。比較すれば、まさに最良の部分がそこから借用していて、まさにそこからの逸脱の中に疑念を引き起こす立場が見いだされることがわかる。誤解を取り除く努力の中で新しいより疑念に満ちた誤解が始まるのを可能にし、思考の歩みの中で古い綱領にもたれかかり、原則を再生しているが、多くの点でより煩雑に、より不明瞭に、より臆病になっているのがわかる。それは博士学位論文としては長所なのかもしれないが、既存の社会体制

に対して闘う政党の戦闘宣言としてはそうではない。だが、どの社会民主主義綱領もそのような宣言である。

オーストリアの綱領委員会のメンバーたちのような、とても学識豊かで熟達した多数の党同志が、ハインフェルト綱領を確実に改善することに成功しなかったのが、このことは二つのことを証明している。まず、綱領の修正には、なおその時期に達していないこと、次に、ハインフェルト綱領は芸術作品であり、それを受け入れたり放棄したりすることはできるが、その纏まりと調和を破壊しそれを傷つけることなしに、何かを付け加えることは難しいということである。だがすでに述べたように、アドラーは、ハインフェルト綱領の修正は、理論的な考慮よりも審美的な考慮の産物であると伝えていた。少なくとも、綱領に対する修正はわれわれには痛ましく感じられるという審美的な考慮はない。

要するに、バルベデーレの中庭のアポロ^(訳注4)に水着を着せているのは、彼の裸が人びとの感情を害するからだ、という英国の気取った戯言についてわれわれは講じたのだ。このようにして、綱領委員会は、多くの上品な修正主義者たちに淫らな思想を喚起するかもしれないマルクス主義の弱点を隠そうとして、ハインフェルトのアポロに水着を着せたのである。疑いなく、水着は全くよい形であり、まことに丈夫な生地できていて、アポロは本来の裸の姿でこそより素晴らしいのである。

清浄な者にはすべてが清浄なのであり、マルクスを正しく理解している者は、ハインフェルト綱領も正しく理解するだろう。そうでない者には、どんな水着も注釈的な解釈も助けにならない。

《訳注》

- 1 本稿はKautsky, Karl, Die Revision des Programms der Sozialdemokratie in Oesterreich, in *Die Neue Zeit*, Jg. 20, 1901, S. 68-82の翻訳である。
- 2 Hertz, Friedrich., Sozialreform oder Revolution?, in *Sozialistische Monatshefte*, Jg. 3, 1899, S. 376-387.
- 3 「ハインフェルト綱領」の当該部分については、須藤博忠『オーストリアの歴史と社会民主主義』（信山社、1995年）、157-158頁を参照。
- 4 ローマのパチカン美術館に伝わる古代ギリシアの彫刻。J. J. ヴィンケルマンは、「古代のすべての作品の中で芸術の最高の理想（das höchste Ideal der Kunst unter allen Werken des Altertums）である」と賞賛した（Winckelmann, J. J., *Geschichte der Kunst des Alterthums*, Bd. 2, Dresden: Walther, 1764）。